

特集テーマ「改元」

野宮の恋と花山天皇の退位

山本修司

かつて伊勢と賀茂にそれぞれ齋王がいた。伊勢の齋王は当初は律令国家の王権を宗教面から支える役割があった。実在が確認され天照大神の御杖代となつた最初の齋王は⁴代天武天皇の皇女、大伯（大来）内親王であり、齋王制度は⁶代後醍醐天皇の皇女祥子まで約660年続いた。平安時代の⁶代醍醐天皇の御代に編纂された延喜式（律令の施行細則）の最初に「天皇即位ののちに未婚の皇族女性のなかから齋王を定めること」とある。この時代は、卜定の儀で齋王が選ばれると、まず宮中の初齋院で1〜3年間過ごし（職員約80名）、次に郊外の野宮で潔齋生活の日々を約1年間過ごす（職員約150名）。この間に齋宮や頓宮の整備が行われる。翌年9月、伊勢へ出発。大極殿の「発遣の儀」で、天皇が齋王の髪に櫛をさし、「都の方に赴きたもうな」と告げる

（「別れの御櫛の儀」）。この儀式で親子・親族の繋がりを断ち切つて、齋王が神のものになるのである。伊勢まで5泊6日、総勢5000人の「群行」という国家的行事が行われる。途中の宿泊地が頓宮である（勢多、甲賀、垂水、鈴鹿、沓志）。齋宮着任後はひたすら祈りの生活を過ごす。直接神宮に赴くのは年3回（9月の神嘗祭、6月、12月の月次祭）で外宮、内宮の祭祀に参加するのである。齋王が齋宮の外に出るのはこの三節祭の時だけ。齋王退任後は、尼になつたり、京の親元で迎えられたりして静かに暮らす場合が多い。齋王の退下理由は天皇の譲位・崩御、齋王親族の薨去、齋王自身の死・病・事故（不貞行為など）とされていた。

（9） 今回取り上げる齋王は、984年の花山天皇即位に際し卜定されたが、伊勢に群行できなかつた齋王・濟子（醍醐天皇の孫）である。⁶代花山天皇は摂政で外祖父の藤原伊尹の威光により生後10ヶ月足らずで立太子し、永観2年（984）、17才で天皇に即位した。しかし即位時にすでに伊尹は亡くなつており、有力な外戚を失つていた。僅か2年後の寛和2年6月23日（986年8月1日）に突然に退位を強いられ（寛和の変）、出家した。

とここで、花山天皇が退位したわずか4日前の寛和2年6月19日に大スキャンダルが勃発、齋王・濟子は野宮から退下した。いわゆる野宮の恋事件である。濟子女王は、花山天皇の即位に伴い、伊勢齋王に卜定され、初齋院から、寛和元年9月26日に野宮に入ったが、建物が未完成で、禊所の前方に葬送の火が見え不吉だとのうわさが流れた。はたして野宮に盗賊が入り、侍女の衣装が奪われるという前代未聞の出来事もあった。ついに野宮で濟子と滝口武者平致光との密通が露見されたのである。即ち、『日本紀略』によると、寛和二年六月十九日丙辰。伊勢齋王濟子於野宮興滝口武者平致光密通之由風聞。（伊勢齋王濟子が野宮で滝口の武者平致光と密通したという風聞あり）更に『十訓抄』に寛和齋宮、野宮におはしましけるに、公役のたきぐち平致光とかやいひけるものに名立て、群行もなくてすたれ給にけり。それよりぞ野宮の公役はとどまりにける。（滝口の武者平到光が齋王を見初めて、思いを成就させ、そのために齋王は野宮から退下した）。その後の濟子のたどつた人生はまったく不明である。

ところが、本事件勃発の27年後、当時の一級史料『小右記』の長和2年（1013）7月27日の条に到光ら四人が外を歩いていたとある。……馬副が郁芳門の内から走つて来たへ（菅野）親重・（大中臣）義光（伴）致用・（藤原）致光。（現代語訳 小右記6）濟子を犯した大罪人の到光はどうやら大きな咎めを受けていながつたと推測されるのである。花山天皇の退位直前の大スキャンダル、しかもその犯人は大罰を受けなかつたことなどを勘案すると、このスキャンダル事件は天皇の突然の退位・出家、という大事件から世の目をそらすために意図的につくられたという可能性があり、藤

原兼家一門の仕組んだ陰謀ともいわれている。

すなわち、この密通事件は政治の犠牲でありその後、世の中は兼家の子、道長一門の栄華の時代へと移っていくのである。

ところで、当時はさまざまな理由で改元がおこなわれた。花山天皇の前後の天皇の改元をしらべると、^{64代}円融天皇は在位15年間で6回。安和、天禄、天延、貞元、天元、永観である。^{66代}一条天皇は在位25年間で6回。永延、永祚、正暦、長徳、長保、寛弘である。一方、花山天皇は在位2年で寛和の一回である。しかもこの寛和の改元は花山天皇が践祚してから8ヶ月も経過してからおこなわれたので、この天皇は自分の寛和の時代は約9ヶ月間と極めて短かったのである。

濟子の齋王として、また花山の天皇としての活躍はともに短かったが、後世にさまざまな逸話が語り継がれている。野宮の恋のスクヤンダルから、絵巻物『小柴垣草紙』（色好みであった^{77代}後白河天皇の意向で当時の一流絵師により制作された古春画の最高傑作）が描かれた。さらにこれをモ

デルとして、昭和54年に円地文子の小説『彩霧』が出版された。

この小説は、賀茂の齋王の女子末裔に門外不出で代々伝わる春画「賀茂齋院絵詞」にまつわる話であり、この絵巻物を若い時から死守してきた女性（堤沙乃）が年老いて、最後は軽井沢の別荘の庭でこの絵巻物を焼却してしまう。その時彼女の目は虚ろであった。即ち、認知症となっていた。この「彩霧」の発刊当時、有吉佐和子の『恍惚の人』も出版され、大ベストセラーとなったが、このころから認知症という病が我が国で広く知れ渡っていったのである。

花山天皇であるが、『大鏡』では、兼家が、外孫の懐仁親王（一条天皇）を即位させるために陰謀を巡らしたと明記されている。花山天皇の蔵人として仕えていた兼家の三男道兼は、悲しみに暮れる天皇と一緒に自分も出家すると唆し、天皇を内裏から元慶寺（花山寺）に密かに連れ出した。天皇が寺で剃髪したのを見届けたのち、道兼は、そのまま逃げた。ここで天皇は欺かれたことを始めて知ったのである。この出家により一条天皇が即位した。傷心の花山上皇は、

わずかな共と熊野に向かった。熊野古道、中辺路の箸折峠に牛と馬にまたがった童子の像がある。「牛馬童子像」と呼ばれるこの像は花山上皇の姿をあらわしたものだと言われている。この峠までやって来たとき、ちょうど昼時で、箸を忘れたことに気が付いた。そこで供の者が茅を折って箸代わりに上皇に捧げた。以来、その峠を箸折峠と呼ぶようになった。上皇の心は、熊野の地で、癒しを覚え、那智滝の近くに庵を結び、修行をした。

一千日の修行を終えた花山法皇は、西国三十三ヶ所観音霊場巡礼の旅に出て各地で歌を詠んだ。それが御詠歌のはじまりで、那智山青岸渡寺は西国三十三ヶ所巡礼の第一番札所となったのである。

補陀洛や岸うつ波は三熊野の那智のお山にひびく滝津瀬（青岸渡寺のご詠歌）。

法皇は寛和5年（1008）、41才で亡くなった。色好みの法皇は遺言状に「私が死んだら、私の女宮たちを49日の間にみな、あの世へ連れていく」と書き、この言葉どおり、花山院の女宮たちはみな、まもなく死んでいったと伝えられている。

主なる参考文献

- ・現代語訳 小右記6 倉本一宏（編）2018 吉川弘文館
- ・神に仕える皇女たち 原 槿子 2015 新泉社
- ・彩霧・遊魂 円地文子 1979 新泉社

